

今月の特集は、障害者や高齢者のための街づくりについて、障害別の問題や対策だけでなく、都市計画における街づくりの現状や今後の課題、障害者のライフサイクルからみた街づくりはどうあるべきか、提言していただいた。

■ 福祉の街づくりには障害者自身の参加が必須！

点から面への整備と移動の自由を確保すること、縦割りのな取り組みから横断的な事業推進システムを模索すること、そして福祉サイドから都市計画サイドへアプローチするだけでなく、都市計画そのものの中に福祉の街づくりをきちんと位置づけることが重要である。また、障害の種類や程度により解決方法が異なることから、今後は障害者同士が解決策を一緒に探っていくことが不可欠な要件になっていることを強調している。(杉山 彰氏, 99 頁)

■ 車いす使用者の移動を保障するために路面バスの整備を！

既存の交通機関を利用できない車いす使用者は、日常の移動を自家用車か障害者専用の移送システム（ハンディキャブ）に依存しているが、ハンディキャブはボランティア組織に負うところが多く、現状では彼等の移動需要に全面的に応ずることは困難である。今後は経済的負担の問題を含め、道路環境の整備、ヨーロッパ型低床バスの導入など、その整備拡充が求められているが、わが国の狭い道路事情を考慮した独自の研究も必要である。(藤井直人氏, 105 頁)

■ 高齢者にやさしい街づくりとは？

高齢者が日常ちょっとした段差にもつまずき、転倒・骨折するのは加齢による筋力低下だけが主な原因か。果たしてそうではなく、実は危険を察知し、行動の方向を定めるための知覚の働きにも大きな原因がある。たとえば、警告用の黄色は白に見えることがあるし、警告・予告音はとくに聞き取りにくいので注意が必要である。今後は、高齢者の目や耳などの感覚器官の変化も考慮した地域環境づくりが求められている。(吉田あこ氏, 111 頁)

■ 視覚・聴覚障害者に対するバリアフリーデザイン

視覚障害者に対しては、単にブロックを設置すればすむというものではなく、その地域ないしはルート上の空間認知ができる街づくりが求められている。具体的には、音声信号・音声案内方式の拡充、線状・点状ブロックの統一、音声情報、磁気誘導の拡大、駐車問題などの解決が必要である。聴覚障害者については、わが国のみならず、欧米諸国においても対策が遅れている。「障害が見えない」ことがその主な原因と思われる。いずれにしても、視覚・聴覚障害者の街づくりはこれからである。(久下晴巳氏ら, 117 頁)

■ ライフサイクルからみた街づくり

人は「目的の場所に、自分の選択と意志に基づいて移動（歩行）する」という基本的欲求をもっており、これを満たすことは単に便利になるというだけでなく、意欲的な精神活動や社会活動を保障することであり、人としての一生を左右し、人間としての尊厳さを実現することだと強調している。このため、社会生活への要接近能力（AASL: Ability to have Access to Social Life）という概念を提示し、このレベルをできるだけ低く設定することが住民にやさしい街になることだと主張、最近の街づくりについて、JR 幹線の主要駅に設置された鍵の掛かったエレベータ、障害者用駐車場の閉鎖性など、むしろ AASL レベルを高めてしまうやり方に強い疑問を投げかけている。(齊場三十四氏, 127 頁)